TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　631語

The Children in the Moon

お月さまの中の子どもたち

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Catrina

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　丘の上で、毎日水くみをさせられるジャックとジル。ある月夜、水くみに出かけると、ふしぎな歌声が聞こえてきて……。

They had no idea where they came from. All they knew was that they lived on the hill, and that the old man of the hill called them Jack and Jill. They had plenty of berries to eat, and when night came, they had soft beds of fir to sleep on. There were all kinds of animals on the hill, and they were friendly to the two children. They could have had a most delightful time playing all day long if it had not been for having to carry water.

Every morning, just as soon as the first rays of the sun could be seen from their home, they heard the voice of the old man of the hill calling, "Jack! Jill! Take your pail and get some water." Whenever they were having an especially pleasant game with some of the animals, they heard the same call, "Take your pail and get some water." It is no wonder that Jack awoke one night when no one called and said, "Jill, did he say we must get some water?" "I suppose so," answered Jill sleepily, and they went out with the pail.

The moon was shining down through the trees, and they imagined that she was nearer than ever before. The forest was not half so lonely with her gentle face looking down upon them. Soon they felt happier than at first, and they played little games together, running from tree to tree.

"We have spilled half the water," said Jill.

"There's plenty left," said Jack, "if half is spilled."

"Do you suppose there are any children who play games whenever they like and do not have to carry water?"

"Plenty of them," declared Jack.

"Jack and Jill
Went up the hill
To get a pail of water,"

sang a voice so clear that it seemed close at hand, and so soft that it seemed far away.

Jack started, fell, and rolled down the hillside, and Jill came tumbling after. As for the water, what was left was spilled before Jack had rolled over once; and before he had rolled over twice, the same voice sang,—

"Jack fell down
And broke his crown,
And Jill came tumbling after."

"It is about us," cried Jill.

"I have not broken any crown," said Jack.

"It is the crown of your head," declared Jill.

"Oh!" said Jack; "but where's the water?"

"It has gone tumbling down the hill," answered the same voice.

"How can water go tumbling?" cried Jill. "We tumbled."

"Water tumbles too," replied the voice, "especially when it is frozen."

"Oh!" said Jack.

"Oh!" said Jill.

"The stream is frozen," called the voice.

"What stream?" asked the children together.

"The stream that goes down the hill," answered the voice. "Did you not know that you were bringing water to keep the stream full?"

"No, indeed," said the children.

"The old man of the hill is only a rock, and what you thought his voice was only the water flowing around it."



"Oh!" cried Jack.

"Oh!" cried Jill.

"The stream is frozen," said the voice, "and the earth has a cloak of snow and ice."

"Who are you?" asked Jill shyly.

"Do you really not know? What a strange child you are! I am the moon, of course. Very pleasant people live with me, and I have come to invite you both to go home with me. Will you come?"

The children looked up through the trees, and there was the gentle face of the moon, looking more gentle and kind than ever. "Come," said she, and they went very willingly. They have lived in the moon many years, but they never again

carried a pail of water for a stream. "That is the work of the clouds and the sun," says the moon.

ふたりは、自分たちがどこから来たのか、まったく知りませんでした。知っていたのは、自分たちが丘の上にすんでいて、丘のおじいさんが自分たちをジャックとジルとよんでいる、ということだけでした。食べるベリーはたっぷりあって、夜になると、モミの葉のやわらかいベッドでねむりました。丘にはいろいろな動物がいて、ふたりの子どもとなかよしでした。水を運ばなくてもよければ、ふたりは一日じゅう遊んで、とても楽しくすごせたことでしょう。

毎朝、家からお日さまの最初の光が見えるとすぐに、丘のおじいさんのよぶ声が聞こえました。「ジャック！ジル！バケツを持って、水をくんでおいで。」動物たちとすごく楽しい遊びをしているときでも、いつも同じ声が聞こえました。「バケツを持って、水をくんでおいで。」ですから、ある夜、だれもよんでいないのにジャックが目をさまして、「ジル、おじいさんが水をくんでこいって言った？」と言ったのも、むりはありません。「そうだと思う」とジルはねむそうに答え、ふたりはバケツを持って出かけました。

お月さまが木々のあいだから光をそそいでいて、ふたりには、お月さまがいつもより近くにいるように思えました。お月さまのやさしい顔が見おろしてくれているので、森はちっともさびしくありませんでした。まもなくふたりは、さっきよりも楽しい気分になって、木から木へと走りまわりながら、いっしょにちょっとした遊びをしました。

「水が半分こぼれちゃった」とジルが言いました。

「半分こぼれても、まだたっぷりのこってるよ」とジャックが言いました。

「好きなときに遊べて、水を運ばなくてもいい子どもって、いるのかな？」

「たくさんいるさ」とジャックは言いきりました。

「ジャックとジルは
丘にのぼった
バケツに水をくみに」

と歌う声がしました。その声はとてもすんでいて、すぐそばのようにも聞こえ、とてもやわらかくて、遠くのようにも聞こえました。

ジャックはびっくりして、ころんで、丘の斜面をころがり落ち、ジルもあとからころころころがりました。水はというと、ジャックが一回ころがらないうちに、のこりがみんなこぼれてしまいました。そしてジャックが二回ころがらないうちに、同じ声が歌いました――

「ジャックはころんで
あたまをうって
ジルもころころ ころがった」

「わたしたちのことを歌ってる」とジルがさけびました。

「ぼく、かんむりなんかこわしてないよ」とジャックが言いました。

「頭のてっぺんのことよ」とジルは言いきりました。

「そうか！」とジャックは言いました。「でも、水はどこ？」

「丘をころころころがっていったよ」と、同じ声が答えました。

「水がどうやってころがるの？」とジルがさけびました。「ころがったのは、わたしたちよ。」

「水だってころがるさ」と声は答えました。「とくにこおっているときはね。」

「そうか！」とジャックが言いました。

「そうか！」とジルが言いました。

「小川がこおっているんだ」と声がよびかけました。

「どの小川？」とふたりはいっしょにたずねました。

「丘を流れくだっている小川だよ」と声は答えました。「きみたちは、小川をいっぱいにしておくために水を運んでいたんだって、知らなかったのかい？」

「ぜんぜん知らなかった」とふたりは言いました。

「丘のおじいさんは、じつはただの岩で、きみたちがおじいさんの声だと思っていたのは、そのまわりを流れる水の音だったのさ。」

「そうか！」とジャックがさけびました。

「そうか！」とジルがさけびました。

「小川はこおっている」と声は言いました。「そして、地上は雪と氷のマントをまとっている。」

「あなたはだれ？」とジルははずかしそうにたずねました。

「本当にわからないのかい？なんてふしぎな子だろう！わたしはお月さまに決まっているじゃないか。わたしのところには、とても楽しい人たちがすんでいてね。きみたちふたりを、わたしの家へまねきに来たんだよ。来るかい？」

子どもたちが木々のあいだから見上げると、そこにはお月さまのやさしい顔があって、いつもよりもっとやさしく親切そうに見えました。「おいで」とお月さまが言うと、ふたりはよろこんでついていきました。ふたりはもう何年もお月さまの中でくらしていますが、小川のためにバケツで水を運ぶことは、二度とありませんでした。「それは雲とお日さまの仕事だからね」とお月さまは言います。

たんご と クイズ　お月さまの中の子どもたち

hill 丘	**pail** バケツ	**water** 水
berries ベリー・木の実	**moon** お月さま	**crown** 頭のてっぺん（かんむり）
stream 小川	**rock** 岩	

Q1 ジャックとジルが毎日しなければならない仕事は？

① 水くみ　② まき集め　③ 動物のせわ

Q2 「丘のおじいさん」の正体は？

① お月さま　② ただの岩　③ クマ

Q3 歌っていた声の主はだれ？

① 小川　② ジャック　③ お月さま

こたえ

Q1 ① 丘のおじいさんが「バケツを持って、水をくんでおいで」とよぶので、毎日水を運んでいました。

Q2 ② 丘のおじいさんはじつはただの岩で、ふたりが声だと思っていたのは、まわりを流れる水の音でした。

Q3 ③ 声の主は「わたしはお月さまに決まっているじゃないか」と答えて、ふたりを家にまねきました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Catrina（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。